



海と日本 PROJECT in かがわ かがわ sea マスター

海の食を守り隊

さととうみ 新聞み

「船の上から魚が見えるよ」「プランクトンがいっぱいいた」一。観音寺市の伊吹島沖などで10月24日、隊員たちは海水を採取してプランクトンの観察をしたり、県内各地で見つかった海ごみについての映像を見たりして、きれいな海を守るためにはプラスチックごみを減らすなど、日頃の生活を見直すことを誓い合いました。

海上タクシーで伊吹島の沖合に出て、県水産試験場の担当者の指示を聞きながら海水を採取。船の上から魚が泳いでいる様子が見えるほど水は澄んでいました。豊かな漁場となっている同島周辺の海水を顕微鏡で観察すると、カタクチイワシが好んで食べる「カイアシ類」など、たくさんの種類のプランクトンがいることが分かりました。

映像では、まちに落ちていたレジ袋やペットボトルなどが川を通じて海に運ばれ、小さく砕けたマイクロプラスチックになって魚が食べ、食物連鎖の結果、人間も口に入っている可能性を指摘。ビニール袋をクラゲと間違えて食べたカメが窒息した事例なども紹介していました。

ダイバーの人が県内の海で拾い集めた菓子袋や釣りの道具、プラスチックの食器、ライターなど、あまりにも多いごみを見ていると、悲しい気持ちになりました。

海にいる生き物を守るためにも、生活の中で出るごみをできるだけ少なくすることが大切です。買い物の際は必ずエコバッグを使い、ごみを捨てる際も、再利用できるものは分別したり、まちに誤って漏れ出たりしないよう気を付けます。



海に出て水質を調査



日本財団が推進する「海と日本プロジェクトinかがわ」の一環として、10月24日と30日に開かれた「かがわseaマスター海の食を守り隊」。隊員に選ばれた県内小学5、6年生計19人がまとめた今回の新聞のテーマは「海と山のつながり」です。

坂出でフィールドワーク

隊員たちは30日、坂出市の五色台でフィールドワークなどを行いました。山の木々がつくった土などの栄養分が水の流れて海にたどりつくことを学習した後、山に入って土の状態を観察。踏み固められた地面は保水力がほとんどないのに比べ、落ち葉が堆積した土には驚くほど多くの水が染み込み、流れ出る水が澄んでいることを

確認しました。香川大の担当者が、山々の木々の伐採が進みすぎると、雨が降ったときに土砂や濁った水が一気に海に流れ出て、周辺で海藻や魚が取れなくなったり、森林が豪雨などの際、水の流出量を調整する「緑のダム」に関心を示しました。



森の保水力を観察